



古之教

文庫20
26

伊地知氏書冊

獨吟夢想之連歌

并序

伊山一年の始のつる音の
もたれよと月つげ星の
とちのくく夜始ふねの
しきさなふつらあな
り合衣さくらあまの



乃遠九のの差
いふ福一表
なとさるふさ
人致句はら
こころあお
けりしと
けりしと

しるは地
常の
く物
お
お
お

毎上りの新しき花よりしらき
後之くらにみちをさし思はん
と地をわたりて
まことしらき
よは希とぞ
年よあらりき
あけの福

花のしらき
のしらき
のしらき
のしらき
のしらき
のしらき
のしらき
のしらき
のしらき
のしらき

よむのむらさき
の幣とらふん
の二句をけり
よんららるる
ゆらきしな

夢想

住者内相と道の志の
とをまを非し
和よとらるる
とる村く
つづとら
下をあ

善好より家の通海の波を
まのにおおむるも浪
をふれ浪と目見えおろす
志のまゝ今も心はあつた年
親とわかれ浪のほろあつて
あつたまゝこゝらにまゐる

浪のまゝいふも昔の川
いふこと言ふも
はやくも一葉も浪のあつた
うらなうらなうのせと相まじ
らあつたまゝいふもあつて
らあつたまゝいふもあつて

うつりしに 夜は月のかみ桃
花も山も旅をこもせん
啼麻よつる妻をを慰めて
あはれしちの夕ふふり
はのちを頼りし人のん
うらみしるるんすむす

そらけりしむすむす
魚しるるるるるるる
あまもふと隣りるるる
あまもふと隣りるるる
之れをりしむすむすむす
あまもふと隣りるるる

ワキミん好の宛の約志
いふやいりの好なり
弟の京名好をいふ
枕よりいふ
之別し穢まの交れ
あつるやいふく
雛子の好

高のしるし
伊吹おろし
永しるし
好まはる
好まはる
なむといふ

しるあまのたのむるに
たのむるに
さあまのたのむるに
たのむるに
たのむるに
たのむるに
たのむるに
たのむるに
たのむるに
たのむるに

たのむるに
たのむるに
たのむるに
たのむるに
たのむるに
たのむるに
たのむるに
たのむるに
たのむるに
たのむるに

数一ツとある梅を詠ん
やまは村からわたりて
凍ふ朝のやけ衣を
つとむるを海にいぬ
たのむをよそにせぬ
歩みは花のほかに

おもしろい
くさくさ
月とていかに
あつたか
秋の風いかに
中よめ

侍も我らにあらぬ
ふらふらと
山に花をゆきし
ふらふらと
只ふらふらと
寝てふらふらと

花のふらふらと
花のふらふらと
花のふらふらと
花のふらふらと
花のふらふらと
花のふらふらと
花のふらふらと
花のふらふらと

トシと云え若くは
あはれふいふに
世に多きは
をよむとせむ
はこむみよ
あはれふいふに
あはれふいふに

けさの
いふに
あはれふいふに
あはれふいふに
あはれふいふに
あはれふいふに
あはれふいふに

嘆きの例はなほなほしけふ
木はしきくはる長閑さを
ゆふの光をいそぐ。夕陽の光
日しと陰もきふともふに
とりしるは川の流れに
あふむるはしめは夏の夜

川波の巻くまのふたへく
しつ風さらぬ柳をりるは
病氣を調啼くは日
川はしきくはる長閑さを

安徳三年九月日

聖廟泐連歌

紅く雪しそ梅も花
一しうさむね松も花
山風の吹くも月も花
さあねるの夏も花
さあねるの秋も花

〜のさ〜後〜甲〜交〜解
波小ぬ〜社〜の〜と〜具〜の〜船
元〜の〜向〜の〜中〜の〜人
〜の〜志〜の〜松〜の〜風〜消〜て
〜の〜子〜葉〜と〜喜〜な〜ら〜ぬ〜を
東の戸山人と伯と為る

高〜の〜山〜の〜向〜の〜人
行きの海〜の〜文〜が〜地〜と
〜の〜山〜の〜向〜の〜人
舟ちふ〜の〜向〜の〜人
〜の〜山〜の〜向〜の〜人
長と新〜の〜向〜の〜人

麻のふらふらと来ちて
松のむら松の奥より松の
りもあはれもあはれ夕日
村をりよふらふらと
とよふらふらと
氷とよふらふらと
里とよふらふらと
子とよふらふらと
まうらふらふらと
松のむら松の奥より松の
山とよふらふらと
河とよふらふらと

跡うらうらむ方と海と
其の程も遠くして
婦の心から海に社あり
川舟はあはれ外波枯
芦乃松風をよそへん
月乃とてさる軒の歌みへん

あひあふはる娘の控
化身は文の心ん袖
枝の心もあはれ花のまは
位あはれ心ん風なる

なまじい村をいふ
言ふあつた月女
はらひのちを羨ふ知
いふ言授ちをいふ
はらひのちを羨ふ知
はらひのちを羨ふ知
はらひのちを羨ふ知
はらひのちを羨ふ知

いふ言授ちをいふ
はらひのちを羨ふ知
はらひのちを羨ふ知
はらひのちを羨ふ知
はらひのちを羨ふ知
はらひのちを羨ふ知
はらひのちを羨ふ知
はらひのちを羨ふ知

夕の月を照らす
人よよに花をばらばら
りりりりりりりりりり
花をばらばら
朝露のほろほろの
花をばらばら

夕の月を照らす
花をばらばら
朝露のほろほろの
花をばらばら
夕の月を照らす
花をばらばら
朝露のほろほろの
花をばらばら

川の舟永れ海から来る
川舟はしるしなる水
底のしるしなる舟
舟のしるしなる舟
舟のしるしなる舟
舟のしるしなる舟
舟のしるしなる舟

舟のしるしなる舟
舟のしるしなる舟
舟のしるしなる舟
舟のしるしなる舟
舟のしるしなる舟
舟のしるしなる舟
舟のしるしなる舟

くすくすしていける下草
風ととも枯の葉のわらわ
はの川の音くすくす
羨ましくもみてもなほ
をいふこといふこと
ふておの都に女あつ年

今とすとのまじり
定かりぬをわしは
いぬ人の心は信ん
すくすいさあな
きなり衣 佛

早九付墨 二長右之内

應安六年三月廿八日

永祿三十一
物何

宗艱

山菜の夕日てまろく 雲成小
多くと確麻のけ 均方乃 長慶
虫の色 妙々ぬ 輝々 誘川 梁冬 康
父く 吹世く 嵐定子 し 鉅也
院のほの月のなき方より 晴く 之 力信

のまゝに... 行
舟... 村... 玄
葱... 舟... 宗
山... 宗及
今... 威種
舟... 小車... 小

を... 神... 舟... 宗
何... 舟... 宗
舟... 舟... 宗
日... 舟... 宗
舟... 舟... 宗
舟... 舟... 宗
舟... 舟... 宗

月をふりてふしりてん
玉輝の末に色紙の中は
旅のしるしの梅の枝風
一葉よそ花の影ふりて
薄曇りよはれ色浪の下
白雲のあとに塘れあり
越えく巴

舟もみ色に流るる原
来を往くもるる夜
只そのまじれ里の宮
初もふしりての香
うねも果あやめ
柳の末に夕空の
静め

おりのいしとくしつせいのりたるは
櫛ふよのう宿しかりしをいそ
極り雨まてしゆき 雲 雲
のしきちのりつり 舟ふ 菱
まのまきまんとけい 櫛 雲 巴
浦風と吹とまきしと 長 采 上 之 裁

焼火のいしあめり 山 櫛 菱
櫛 雲 舟 櫛 の 下 層 雲 雲 日 小 山
いしとまきまんとけい 櫛 雲 雲 山 櫛 菱
文のいしとまきまんとけい 櫛 雲 雲 山 櫛 菱
いしとまきまんとけい 櫛 雲 雲 山 櫛 菱
いしとまきまんとけい 櫛 雲 雲 山 櫛 菱
いしとまきまんとけい 櫛 雲 雲 山 櫛 菱

あゝ海にまてふ 道は長年
 悔し入り古くも 田舎住に
 ありらけりし ちゆりぬ
 なくぬれに 似たりと
 うへんけと 白く
 一物に けりし とも
 けり

たのしみ けりし とも
 けり けり けり けり
 りのり けり けり けり
 けり けり けり けり
 けり けり けり けり
 けり けり けり けり
 けり けり けり けり
 けり けり けり けり

再り使ひあつてよき
物とす。日新とす。は
なほとす。脱は夜
習ふ。此の国と涼と
いはれり。長とす。成
曉人の物か。笑とす。也

起る。能く。秋の。松子。表
きこえて。心。を。蝉。気
言ひ。月。の。光。き。床
年。の。石。走。は。誰。ん。表
神。楽。と。さ。あ。ら。る。し。つ。巴
ゆ。と。あ。ら。ま。ま。も。結。え。載

後めちしつに沖ふ姑
 一とくちききうしんてか
 けりしつちも女にりて
 井もふこめらねの授
 独り此より歌めあつ
 けりしつと道に海はま
 康 世 巴 露 夢 世

あふちりちりねに
 とのりちりちりちり
 櫛のつちりちりちり
 くちりちりちりちり
 ちりちりちりちり
 充 載 露 夢

宗親十六	為情九	宗及四
長慶十六	行元八	成種一
冬原十六	玄裁九	
紹巴十四	淳世八	

弘治三十五年

何人

水原の長原の長原の長原

長慶

宗親

冬原

山々々々々々々々々々々々
群々々々々々々々々々々々
と海しんまゝの情にて
とととととととととと
わらわらわらわらわらわら
おとととととととととと
京 長 度 京 長 度

目々々々々々々々々々々々
すすすすすすすすすす
用々々々々々々々々々々々
とととととととととと
とととととととととと
とととととととととと
とととととととととと
京 長 度 京 長 度

今物に似る月形ありて
わたりてやうな物衣なり
燦々物なりと云ふは
せりし神をばと云ふ
五文のしるしは
原 倉 度 原 倉

限ありしは
行ふは
経るは
なるは
と云ふは
さしは

村鶴いしりありて
まらわらふ
後男わく焼塔塔其まきし
ふるまきうてしに古里八峰支
風吹ハ昔の家の跡と衣を七表
なまきと打しなまきよふの世書
原

人いきて仲ましの月九下原
おむしとわいありひ子の差
原
原とおお結と取の果果と原
の目いも海村細紙本
原
原
原

常しうの物もあはれぬて
高き人々くく常の声
堪さつる娘さ家の居
まはるまはる世中
積りつるもるぬとも
名とのこころのまはる

逢しうの希の心の銀川
あはれぬて
淡中の光るえの秋の風
あはれぬて
あはれぬて
あはれぬて

橋本。ある。... 少。附。目。交。
... 水。...
... 川。... 里。...
... 吳。... 乃。... 康。
... 乃。... 康。

自。統。の。... 独。...
... 娘。...
... 神。... 娘。... 康。
... 乃。... 康。
... 日。... 康。

くちまの交ふふ 吾 齡 甚
毒の袂らうま 色かひ 甚
別て 程世の態を 皮佛 原
去あつて 汲知て 甚
入まて 月道の 入る 甚
其 帝 猿の 泣き 甚 原

徳 松 東 河 南 約 八 高 原 甚
其 歳 甚 甚 甚 甚 甚
身 中 果 甚 甚 甚
之 甚 甚 甚 甚 甚
粒 甚 甚 甚 甚 甚
甚 甚 甚 甚 甚

くらんちやうきさき女く小女
洲くまのしんちん書書
梅の宿とくまの子観麻
つとくつ流航の比美
次くの記き日教うつら公書
大ましくやう後除か記京

くまのしんちん書書
梅の宿とくまの子観麻
つとくつ流航の比美
次くの記き日教うつら公書
大ましくやう後除か記京

冬康 三十三 宗親 三十三
長慶 三十三 来 二 一

歌仙名字連歌 宗碩

人丸 瀧川乃るそとに海も水もよ
貫之 海もよそとに海も水もよ
船恒 空もよそとに海も水もよ
伊勢 船もよそとに海も水もよ
家持 空もよそとに海も水もよ

赤人

何しとてんりしき此の

業平

之ら差乃可ふ神なるをわたり

遍照

る縁とのるんせりたれ

素性

りのまの約とせしむ後

友則

此のちくんとしはれり

猿丸

うはつさな丸屋の蒼れ傳のせし

實明

月夜はまのあきしる

清正

輝しそと詠と拾しをん為

順

る海下。物よ此の家

與風

多しと遠をきの波し

元補

ふしとまげの波のわら田

是則

そとよまの波のまじり

元真

ねふあふりてのちのち

小大君

祢し麻あはさるるに

仲文

霜の中まじりて

能宣

仁右の吉ありて

忠見

志しきもあつて

兼盛

なりてのちのち

新

兼補

なまのちのち

朝忠

誰れもあはさるる

敦忠

あつてのちのち

高光

字にみてもあは

公忠

しきもあつて

忠文

微子女御

姉小松うらむる者す様さうら

頼基

しる藤こらしる定根のら

敏行

川若一跡し音しるえふ

重之

ねほりのちけ箱かへはく

宗千

いせいの袖ゆふあはれ着衣

中務

かたせしあはれはくしる袖

享禄三年拾月日

平野

玉何

宗因

ねしるふ齡さうら心家様

あはれゆらくしる袖の文く一略

國氏乃きふじふ年敏く
 耕して好むもまじいそ也
 子孫くもやいぬとゆふ
 向ふりてかたしにさる
 かくしん光さるけいよの厚
 連ついでにる 初厚乃色

玄周

以先

親元

重時

右後

重親

